

日蓮の法華經觀

—道元との比較—

三 輪 是 法

鎌倉仏教の祖師の中で、日蓮と道元は、特に法華經によってその教学的基盤を形成したと考えられる。日蓮はもとより、曹洞禪の開祖である道元もその法華經の引用の多さから、自身の思想に何らかの影響を与えたことは疑いないことであろう。

道元の法華經觀について、日蓮教学的見地から疑問点を設定すると、「道元は果たして文中に『法華經』という題目を意識して引用していたかどうか」ということが問題となり、結果、道元が述べる「法華經」に関する名称は、經文引用の出典名として、つまり法華經の題目として認識していたということは数例で、多くの場合、法華經の主要的思想である「一仏乘」・「諸法実相」・「釈迦仏」・「如来」と等位に解釈している特殊な場合が見られた。これは、法華經の題目に法華經の思想的内容を持たせて引用するということで、日蓮のように題目を重視し、題目が法華經の名・体・宗・用・教すべ

てを包摂していると説く立場と、類似しているといえる。

そこで今回は、道元的見地を設定し、そこから日蓮の法華經觀の特徴を確認してみたい。つまり、法華經の何を中心思想と見るかということである。『正法眼蔵』『法華転法華』『阿羅漢』『諸法実相』『授記』等の巻を一瞥すると、道元が法華經の教説の中で何を重視していたかが理解される。すなわち、「教菩薩法」・「開示悟入」・「一仏乘」・「諸法実相」・「授記」といった法華經の行心思想であり、先に述べた題目によって顕されているものと通じるものである。これは「法華転法華」中、「これは妙法蓮華經ともなづく」という題目の付随性を説く部分から、道元が法華經の教説それ自体に重点を置いていたことが理解できる。

また、ここで確認しておきたいことは、道元の法華經觀が、「過・現・当来箇にあらざれども」（春秋社『道元禪師全集』第一卷四六一頁『正法眼蔵』『諸法実相』）と説くように、常に

「今」という時間に立脚していることである。この普遍的現実観は『正法眼藏』『授記』に、法華經中の「如来滅度後」という時間規定について、三世に渡る自己実現の「今」を中心にして説いていることから確認できるのである。

道元に見られるような法華經の主要思想について、日蓮も同様に認めており、「一乗」・「授記（二乗作仏）」・「開示悟人」「本行菩薩道」「諸法実相」といった思想から法華經の超勝性を説いている。しかし日蓮には自らの体験を通して認識した教説があり、「難信難解」・「久遠実成」・「付属」等は、道元と一線を画する日蓮独自の法華經觀といえる。畢竟日蓮の法華經觀は、様々な法華思想を統括する形で、本門・題目に極まるのである。

ここで日蓮が説く法華經教説に関する時間について着目すると、『法華取要抄』（昭和定本八二三頁）には「問て曰く法華經は誰人の為に之を説くや。答て曰く方便品より人記品に至までの八品に二意有り。上より下に向て次第に之を読めば、第一は菩薩第二は二乗第三は凡夫なり。安樂行より勸持・提婆・宝塔・法師と逆次に読めば滅後の衆生を以て本と為す」（原漢文）と、授記を受ける順位について、法華經の教説通り、つまり法華經の時間に従う菩薩中心の順位と、逆次の「滅後の衆生」を中心にした順位の二意あることを説示しており、日蓮の法華經教説に関する時間規定が、仏在世から滅

後に向かう歴史的時間と、仏滅後から在世へと流れる救済的時間の二方向あることを認識できる。特に後者の場合は、『種種御振舞御書』（昭和定本九七一）に「在世は今にあり、今は在世なり。法華經の肝心は諸法実相ととかれて本末究竟等とのべられて候は是也。」と説くように、經文に説かれる時間を、日蓮自身が存在する時間と同時に見ることの前提となる時間規定なのである。

日蓮と道元の法華經觀を比肩して解することは、その違いが、ひとつに法華經の教説を認識する時間軸の設定にあるということである。すなわち道元の時間が、常に自身をも包含した自己が存在する、「今」という時間に立脚して法華經を觀る、「刹那の時間」であるのに対し、日蓮は法華經の時に準じて觀ながらも、「久遠実成」「付属」を中心に、滅後（本門）から在世（迹門）へという衆生救済を現実として觀る「円環の時間」なのである。

〈キーワード〉 法華思想、刹那の時間、円環の時間

（日蓮教学研究所研究員）